# 森林レンジャーがゆく

## 夏風にさらわれた生き物

（85）

今年も私にとって最も過ごしにくい時期である夏が過ぎましたが、特に猛暑日が多く、山の中でもこれまでとは違った夏を味わいました。災害ともいえる暑さのためか、いつもなら出会えるはずの生き物の姿をなかなか見かけなかったので、少し寂しい夏として印象に残りました。特に甲虫の仲間が例年に比べて少なかったと思います。例えば、子どもたちが憧れるクワガタですが、今年はあまり見かけなかったのは私だけでしょうか。そして、年々見かけなくなってきているミヤマクワガタですが、今年は一度も出会えませんでした。私があきる野に来てから初めてのことです。そして他にも、夏鳥の一部や猛禽（もうきん）類の調査などの結果、過去最低の繁殖率（または繁殖成功率）を記録しました。人間の生活に大きな被害や影響がみられた今年の夏は、自然界でも厳しかったのかもしれません。そんな中、昔ながらの昆虫少年の姿を見付けると、「いいね」と思う反面、「希少となっている種類がいなくなってしまうのでは」と心配になります。よく子どもたちに「これ（生き物）、持って帰っていいの？」と聞かれますが、多くの生き物が激減しているこの時代

では、「持って帰っていいよ」とは、立場的に言えません。昔のように豊富でバランスのいい自然の中で、人間の圧力もそれほどなければ、色々な生き物を持ち帰ってもその種類が激減することはないと思いますが、残念ながらこの時代はもうそういう状況ではありません…。

人間が引き起こしている地球温暖化などの影響により、このような結果が生まれているのであれば、我々が自分たちの行いについて、よく考えなくてはならない深刻な問題であると思います。秋の風が吹くこのころ、山に登り都会を眺めていると、なぜか「来年はどういう一年になるのか」と考えている自分がいました。（パブロ）